

ゴールデンウィークが終わり、いよいよ今年度の園生活が本格的にスタートしました。これからの毎日、このつのぶえ保育園が 神様の愛と祝福に満たされ、居心地のいい 心温まる場で在りますように、まず 私達保育者が どんな時も ありのままを 大らかに受け入れながら 安らかな存在として いつも 子ども達の心に 寄り添える者で 在りたいと思っています。

乳幼児期に 何よりも必要で 最も重要なことは、目に見えない『心』を 豊かに育むことです。人が人らしく人として生きるためには 心を たくさん 動かし、懸命に 使い続けることです。けれども ここ最近、自分自身の心と向き合うことが出来ない、しない、あるいは そのことの意味さえ わからないという子ども達が とても多くなって来たことに、大きな 戸惑いと共に 教育の本質を 考えさせられ、危機感も感じています。

想う（想像する、イメージする）こと・信じること・愛すること・気づく（意識する）こと・感じること・祈ること・願う（希望や夢を描き抱く）こと・・・、心とは 内なる人＝その人の核であり、その人そのものです。外なる人＝身体が大きく成長しても 心が 育っていなければ 人としての成熟が 不完全なまま、アンバランスな 大人に なってしまいうでしょう。

自分の心の声を聴き、自らを振り返ったり 見つめ直したりすることは、その人の誠実さとなり 素直さ、謙虚さに影響します。優しさだけでなく、冷静な客観性を 育てることに繋がります。自分との向き合いによって 心を使うことで それはやがて 自分以外のものを 思いやる広さや 深さをつくりあげることでしょう。人の 涙や笑顔など 目に見えることを通して その奥にある 痛みや 悲しみ、喜びや幸せに気づき、自らの心と重ねて感じる事が出来、分かち合う喜びや 感謝、愛する心へと育まれていくのだと思います。

人の生涯において ほんの数年の乳幼児期のわずかな時こそが『心』の 土台を築く 最も大切な 歩みであることを思い、毎日の園生活の中で 私たちは常に 人として 子どもの心に とことん 付き合っていきたいと願っています。未熟な子ども達は 間違えることも 失敗することも また 自分のことしか見えないのも当然です。思い通りにならないことが起きれば そのもどかしさや 戸惑いや 怒り、不安など様々な気持ちが交錯して泣き叫んだり 自分を通そうとしたり 全身で その心の葛藤を表します。そんな時は そーっと見守りながら ゆっくりと待ち、心に寄り添い 想いを受け止め、問いかけ、どうやって どんなふうに 心を使ったらいいのかを その時その時、丁寧に 繰り返し 繰り返し 伝えていきます。私たちも 精一杯 必死に 自分の心を使います。自分本位の考えを 押しつけて 解決しようと急いで、ただ そばにいただけでは、何も生まれず、いつまで経っても 平行線になってしまいます。幼い心の中を わかせてください！と 神様に 祈り 願い ひたすら 想うことで 子どもの心の側に 立つことが出来ます。時には 真っ向から ぶつかることも しょっちゅうです。そういう意味で、子ども達との対峙の時は、私たち自身も 相手の見えない心を見るようになりたいと 必死の真剣勝負の場であることを思わされます。その姿を通して、人が生きていくということは そうやって 目に見えない 互いの心を 何とか わかり合うために いつも 必死に向き合うことであり、分かり合える喜びや 感謝を感じ合い この小さい時にこそ 時間をかけて ひと時ひと時を大切に 育てていきたいと思っています。

この1年も、神様から与えられた 愛する子ども達との 素晴らしい出会いを 感謝しながら、小さな心と 真剣に向き合い、私たち大人も 人として成長させてもらえるよう 願っています。職員一同 心を合わせ、一生懸命 尽くして参りますので、どうぞよろしくお願い申し上げます。子ども達ひとりひとりの幼い清らかな魂の上に 神様の豊かな愛が いつも 豊かに 注がれるとともに それぞれの ご家族の皆様の上に 豊かな祝福を 心からお祈りいたします。（石田 記）
「わたしたちは 見えるものではなく、見えないものにこそ 目を留めます。

見えるものは一時的であり、見えないものは いつまでも続くからです。

（新約 コリント人への手紙Ⅱ 4:18）